

## 読売国際協力賞

1994年、読売新聞の創刊120年を記念して創設された。国際協力・貢献に  
進んで身を投じ、国際協力活動の分野で顕著な功績のある個人や団体を顕  
彰する。受賞者には、正賞の記念品及び副賞500万円を贈る。

### ■ 選考委員（敬称略）

座長 浅尾新一郎 国際交流基金顧問  
中川 幸次 世界平和研究所副会長  
長尾 立子 全国社会福祉協議会名誉会長  
佐藤 行雄 日本国際問題研究所理事長  
水上 健也 読売新聞グループ本社代表取締役議長

### ■ これまでの受賞者・団体

- 第1回（1994年）緒方 貞子 国連難民高等弁務官  
第2回（1995年）AMDA（旧称・アジア医師連絡協議会、菅波茂代表）  
第3回（1996年）明石 康 国連事務次長  
〈特別賞〉遠山 正球 鳥取大学名誉教授  
遠山 証雄 鳥取大学助教授  
第4回（1997年）海外邦人宣教者活動援助後援会（曾野綾子代表）  
第5回（1998年）故 秋野 豊 前筑波大学助教授  
第6回（1999年）難民を助ける会（相馬雪香会長）  
第7回（2000年）中田 武仁 国連ボランティア名誉大使  
第8回（2001年）近藤 亨 ネパール・ムスタン地域開発協会理事長  
第9回（2002年）[財団法人]日本シルバードボランティアズ（渡邊武名誉会長）  
第10回（2003年）[特定非営利活動法人]日本地雷処理を支援する会（JMAS）  
（西元徹也会長）  
第11回（2004年）笹川 陽平 WHOハンセン病制圧特別大使  
〈特別賞〉奥・井ノ上イラク子ども基金  
第12回（2005年）永瀬 隆 クワイ河平和基金代表  
第13回（2006年）[特定非営利活動法人]日本チェルノブイリ連帯基金  
（鎌田實理事長）

### ■ 事務局

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1  
読売新聞東京本社調査研究本部内（電話 03-3216-8904 FAX 03-3245-0219）

## 第14回

# 読売国際協力賞

2007年10月24日

読売新聞社

## 岸田 袈裟 さん



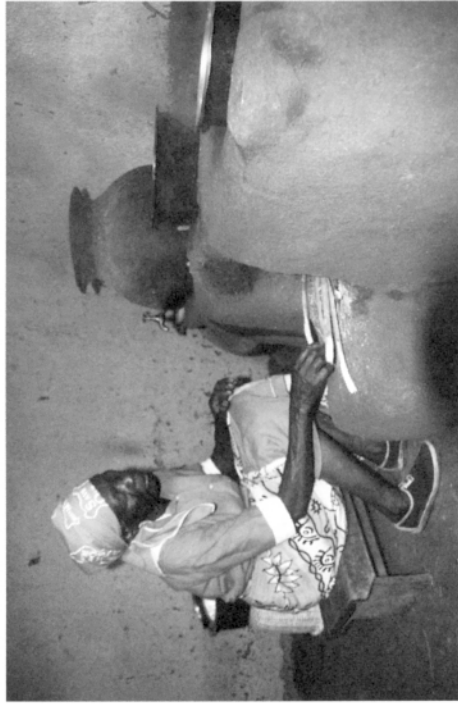
今も貧困と感染症に苦しむアフリカ。受賞者の岸田袈裟さんは、その東アフリカのケニアで30年にわたり住民の健康指導や生活改善に取り組んできました。

元々、栄養学の研究者として食生活を調査するために渡ったアフリカでしたが、現地の生活を知られば知るほど何となくはたしてはとの思いを強くしたといいます。

アフリカの中では比較的恵まれているといわれるケニアですが、衛生・保健の知識普及はまだまだで、人口の30%以上がエイズウイルス（HIV）に感染した地域もあるなどの厳しい状況が続いているといわれます。

日本から遠く離れ資金もモノも不足しがちな状況の中で、現地の人たちの窮状を救うにはどうしたらよいか。岸田さんが考え出したのは、日本式のカマドや草履を現地の材料で作ることでした。

現地の人たちは、川の水をそのまま飲んでいましたが、近くで飼う家畜の排泄物が



日本式のカマドで飲み水を煮沸、滅菌すると、乳児死亡率が激減した



大人気の子ども図書館

混じったりして衛生環境は最悪でした。安全な水の確保は、公衆衛生の第一歩です。そこで土をこねて日本式のカマドを造り、水を煮沸して飲むように徹底したところ、乳児の死亡率が激減しました。このカマドは、それまでの石を並べただけの煮炊きに比べて格段に燃焼効率がよく、薪の量も4分の1。森林の保護にも役立つということで、「魔法の道具」として広く普及するようになったということです。

また、子どもたちは、はだして生活しているためちよっとした足の傷口から菌が入ることも多かったのですが、岸田さんはトウモロコシの皮で編んだ草履を普及させ、子どもたちの足を守るようにしました。カネやモノを日本から持ってゆくだけでなく、現地でも利用できる材料・手法を使っの指導は、真に現地の人たちのためになる援助として高く評価されています。

日本国内の支援団体「少年ケニアの友」の集めた寄付金は、アフリカのエイズ孤児の奨学金に使われています。

連絡先：「少年ケニアの友」日本本部事務局

〒047-0036

小樽市長橋3丁目24-1 北海道済生会西小樽病院内

電話：0134-32-5131

FAX：0134-29-2164